

▶ やまと未来図ワークショップを開催します。

山都町では、町のまちづくりの全体像を示す『総合計画』と地域の具体的な取り組みを示す『地域ビジョン（28の未来図）』を一体的に進めることによって、地域と行政が一緒になった協働のまちづくりを進めています。

この『やまとが輝く28の未来図』は、平成25年11月から約半年間をかけ、全自治振興区でそれぞれ3回の『やまと未来図ワークショップ』を開催し、のべ1,400人の住民参加により策定しました。



未来図にはこんなことが載っています。

- ・キャッチフレーズ
- ・地域の「たからもの」
- ・これからも大切にしたいこと
- ・新たに取り組みたいこと
- ・地域の「チャレンジ」

※28の未来図については、平成27年に各世帯へお配りしておりますが、再度必要とされる方は問合せ先まで御連絡ください。

令和元年度はこの5年間の振り返りとこれからの5年間を考えます。



1回目

28自治振興区毎に、7月から10月の間で開催します。

- ▶ 5年前の未来図にはどんなことが描いてあったかな？
- ▶ 平成27年からの5年間でどんなことができたかな・・・

2回目

28自治振興区毎に、11月から12月の間で開催します。

- ▶ これからどんなことをしたいかな～どんなことができるかな
- ▶ みんなで協力すれば地域の課題も解決できるかな

ワークショップにはどなたでも参加できます。それぞれの地域の開催日は防災無線若しくは山都町ホームページにて御確認ください。順次お知らせいたします。

問合せ先 企画政策課 ☎ 72-1214



8

昭和52年に、旧矢部町で「第3回有機農業全国大会」が開催されるなど、山都町では早くから有機農業が盛んです。この有機農業に関わる「有機の人」を紹介していきます。



うえだじゅんいちろう
上田 潤一郎さんと恵美さん

小笹

「有限会社 くまもと有機の会」
「有機野菜も安全、安心だけではだめで、おいしくないとけません。」
「消費者は舌が肥えています。一方

で、有機野菜が手には入るところを知らない人もいます。」
上田潤一郎さんは、有機農産物の流通・小売事業を行う「有限会社くまもと有機の会」の代表取締役を務められています。取締役の6年を経て代表取締役となり、現在4年目です。本社は御船町小坂にあり、前身の株式会社熊本有機農産流通センター時代を含めて、設立から43年目を迎えます。同社に出荷する生産者49人のうち、山都町が生産者が17人と一番多くなっています。主に熊本市内などの消費者約400戸に、毎週有機野菜の配達をしています。また、卸事業は全体の売上げの3分の2を占める主力事業で、兵庫、大阪、東京の生協や給食事業者など約100件と取引があります。
「消費者の家族の数が減ってきました。若い人向けの野菜セットや売り方を考えないとけません。新聞折込などにチラシを入れ、PRもしています。」

経営はお米と露地トマトで、慣行栽培でした。就農して10年はそれを続けますが、次第に「農薬を使いたくない」との気持ちが出てきます。「周りに有機農業をしている人もいたので、露地トマトに農薬を使わないようにしたのですが、全然だめでした。」
それから作る作物を変え、サトイモやニンジンなど比較的農薬を使わなくていい「根物」を、有機栽培で作ることにします。あわせて、除草剤や殺虫剤を使わない防除方法を取り入れていきます。
「草対策と土作りは、例えばニンジンでは、『太陽熱養生処理』と言って、夏に透明のビニールで畑を覆い、地温の積算温度を60度から70度に上げ、その状態を一定期間保つことで草が生えなくなります」
「虫の被害があるレタスやサニーレタスは、防虫ネットで覆うことで防ぎます。」
現在は、有機栽培では難しいとされる果菜類のナスやピーマン、ミニパプリカやキュウリなども作っています。



「有機農業は苦労もありますが、消費者から直接『あなたの作ったものはおいしい』と言われるます。ただ、『この前は、おいしくなかった』とも言われます。平成28年の熊本地震では、くまもと有機の会の倉庫が全壊するなどの被害を受けました。また、物流が打撃を受け、それまで好調だった業績が3年経った今でも、復調しない状況が続いています。しかし、熊本地震は、これまで築いてきた信用が現れた機会でもありました。
「有機農業をやってきて良かったと思えました。これまで長くつき合ってきた取引先が、食料や飲み物、それにシートなどの物資を持って来てくれました。」
「有機農業は、信用、信頼が大事です。農薬を使っているかどうか、相手は生産の現場をずっと見ているわけはありません。地震以後、お互いの信頼はますます深くなりました。」